

歴史家としての吉田裕先生

原 田 俊 彦

1 吉田裕先生は昨年九月にめでたく古希を迎えられ本年三月に本学をご退職になります。私は法学科目担当教員ではありますが、さまざまな機会に親しく先生と接することができました。先生から多くの教えを受けた者として、先生への感謝の言葉を記させていただければ幸いです。

吉田先生は一九八三年四月に法学部専任講師に着任なさいました。私が法学部助手に嘱任されたのが翌八四年四月です。私は先生とほぼ同じ期間を本学部で過ごさせていただきました。八〇年代半ばまでの本学部では専任講師と助手が同じ委員会に属することもありました。当時は助手も専任の先生方に近しく接することができたのです。それ以来、現在に至るまで、私は先生に親しくさせていただいています。とりわけ昨年までのほぼ一〇年間、同じ委員会の委員として、場合によっては何時間も、議論を交わすことができました。また、私は先生と同じく月曜日に授業を持ち、先生にお会いできる機会も多く、頻繁にお話しできました。さらには、私のゼミ学生の一人が先生の授業の受講生で、トクヴィルやオルテガを読まれているという授業のご様子を彼から聞くこともできました。そして、「自分は法律系というより人文系である」という私の言（実際、『人文論集』五四号には拙稿を掲載いただきました）を

憶えていくださり、私がこの拙文を記すことも甘受いただきました。

先生はフランス文学者でいらっしやいます。先生のこの本来のご領域について記す能力は私にはありません。私の主要な研究フィールドは西ヨーロッパ社会の法の歴史です。この「歴史」というファクターは文学者としての先生の認識で大きな役割を果たしていると私には考えられます。以下では、僭越ながら、「歴史家」としての吉田先生について、私が理解するところを記したいと考えます。

2—① 「書くことの」背後に何か大きなものがあらわれてくる。それは何か。私はそれを歴史と名づけられるように思う。つまりどんな微風もどこかで地球全体の自然の運動につながっているように、個人の人生や心理も、現実のもっとも総体的な動きとしての歴史のうちに位置づけられており、それらを追求する者を歴史の運動に導くのである。」これは先生が本学部に着任された年に著された文章である（初出は「ブランシュと歴史」「人文論集」二二二号、一九八四年だが、引用は「歴史の中の記述——ブランシュの三つのサド論」「詩的行為論」初版、一九八八年、一五七—一五八頁による）。先生はご研究の早い時期から個人の営為（書くという行為）が総体としての社会に関わると理解されていた。社会は動きを伴い、「歴史」としての性格を表出するものだった。

こうした認識はロラン・バルトの『エクリチュールの零度』の分析を通じていっそう明らかにされる。「エクリチュールは、この言語的な自然の中の一機能のようにして開始されながら、それを穿ち、突破し、相対化することによってこの装われた自然の歴史性を明らかにし、そのことを通して〈作家の言葉の規範的かつ個体的なフォルムを他者の広大な「歴史」に結びつける〉。言語を活用する経験は、普通考えられるように単なる共同性あるいは個性性に直結されて解消されてしまうのではなく、その中間に集約され、別の次元へと転化する。その彼方にひらけてくるの

が歴史なのだ。」この文章は先に引用した文章の翌年に書かれた（初出は「歴史の挫折と夢——バルト『エクリチュールの零度』と『ミシュレ』』『早稲田文学』一九八五年一〇月号だが、引用は『詩的行爲論』初版、一三九—一四〇頁による）。「歴史」とは個人の営為を通じて総体としての関係性が「別の次元へと転化する」運動を示すものなのである。

二〇一八年には『詩的行爲論』の増補・改訂版が公にされた。初版との形式的な違いは次のようである。初版では八つの論考が収められていたが、増補版はさらに四つの論考を加え総数一二の論考で構成されるに至った。また、初版では全体が一部構成でそれぞれの論考は並置されていたが、増補版では全体が三部構成となっている。けれども、その本質に違いはないと思われる。初版では、武田泰淳論（「歴史はいかに現れるか——武田泰淳『司馬遷——史記の世界』と「蝮のすえ」」）が巻頭におかれ、歴史は「無名の無数の人間の上に負荷されて現れてくる」（『詩的行爲論』初版、一八—一九頁）という認識が示される。増補版では、第一部として透谷、一葉、啄木が分析され、明治期後半にそれぞれの作家「に負荷されて現れる社会とそれぞれの作家との切り結びが時代を追ってまさに歴史として叙述される。武田泰淳論は第二部の始まりに位置づけられる。つまり、初版では基本的認識が最初に提示され、他方、増補版では個人の具体的分析を経て一般認識の提示がなされていると思われる。

個人が全体状況に結びつけられている関係を自ら主体的に相対化し転換していく過程について分析すること、つまり、個人と全体状況との関係にたいする「歴史的」分析こそ、先生の学問的営為の根底にある、と私には考えられる。

2—② 吉田先生は、昨年（二〇一九年）、ミシュル・アジェ『移動する民——「国境」に満ちた世界で』という翻訳書を上梓された。この作品は私にとってとりわけ刺激的だった。二〇一五年に頂点を迎えた現象、つまり、アフ

リカ、中東からヨーロッパに多数の人々が流入した現象を、この作品は私がこれまで知ることのなかった観点から分析する。これらの多数の人々は特定の原因も目的もなくヨーロッパを目指す「移動民」であり、これまで存在してきた「移民」とか「難民」といった範疇とは異なる人々である。彼らは「コスモポリタン」という属性を持つが、この属性は従来この概念が持っていた内容とは本質的に異なっている。すなわち、彼らはある定住地域と別の定住地域の境界にさしあたり居を占めるためどちらの定住地域に属することもなく、また、さまざまな定住地域から流入するさまざまな人々によって構成されるという点でハイブリッドな構成を持つ。このような人々との接触は境界に接するそれぞれの定住地域にも変化をもたらす。例えば、境界にある人々への支援（ホスピタリティ）は、それを供給する側のアイデンティティを変化させ、従来の「コミュニティ」の枠組からの逸脱を生じさせる。そのような「コミュニティ」の変化は、移動する者たちに支援を求める「権利」さえもたらさう。

以上のごく簡単な内容紹介がさほどのを外したのではないとすれば、この内容紹介によってもこの作品を翻訳された吉田先生の問題意識を捉えることができるだろう。近代国家という枠組は前世紀末以来の変動のため大きく揺らぎ、現状を把握しうる有効な前提たりえていない。そのため、現状そして将来にとって新しい認識枠組が必要である。しかし、すでに新たな世界像を求める試みは模索され、将来のための認識枠組も現れ始めている。このような近代的枠組の大いなる変動と新たな世界像の模索、とりわけ、「移動民」個々人そしてホスピタリティを提供する人々の個別的な主体的な営為によってこれまでの世界が相対化され転換するという認識は、吉田先生のご著作の基調にある「歴史的」認識であろう。

こうした考えに刺激されて、私がこれまで勉強してきた事柄、例えば、ディオゲネス以降の古典古代思想に発する「コスモポリタニズム」（「世界市民」という概念の背後にあるのは、結局、何らかの社会への帰属性、何らかの「市

民権」の保持である）、古典古代における「外人」の在り方（キケロ『義務について』によれば、外人（ペレグリヌス——英語の *pilgrim* の語源——）はかつて「ホステイス（敵）」と呼ばれたが、ローマ市民と「ホステイス」との間では取引もそれに関わる裁判も行われた）について、記したいこともあるが、ここでは控えることにしたい。

3 以上、先生のご研究、お考え、これらから私が学ぶことのできた事柄を、私なりに紹介させていただきました。もちろん、先生は、今後も研究をいっそう展開され、これまで通り、さまざまにご教示くださいますでしょう。けれども、ご退職が一つの区切りであるとすれば、やはり心からお礼の言葉を申し上げなければなりません。これまでの三五年間、さまざまなご教示・ご助言を戴きましたことに心よりお礼申し上げます。そして、今後も健やかにご研究をお続けいただきますよう、心より祈念いたします。

